

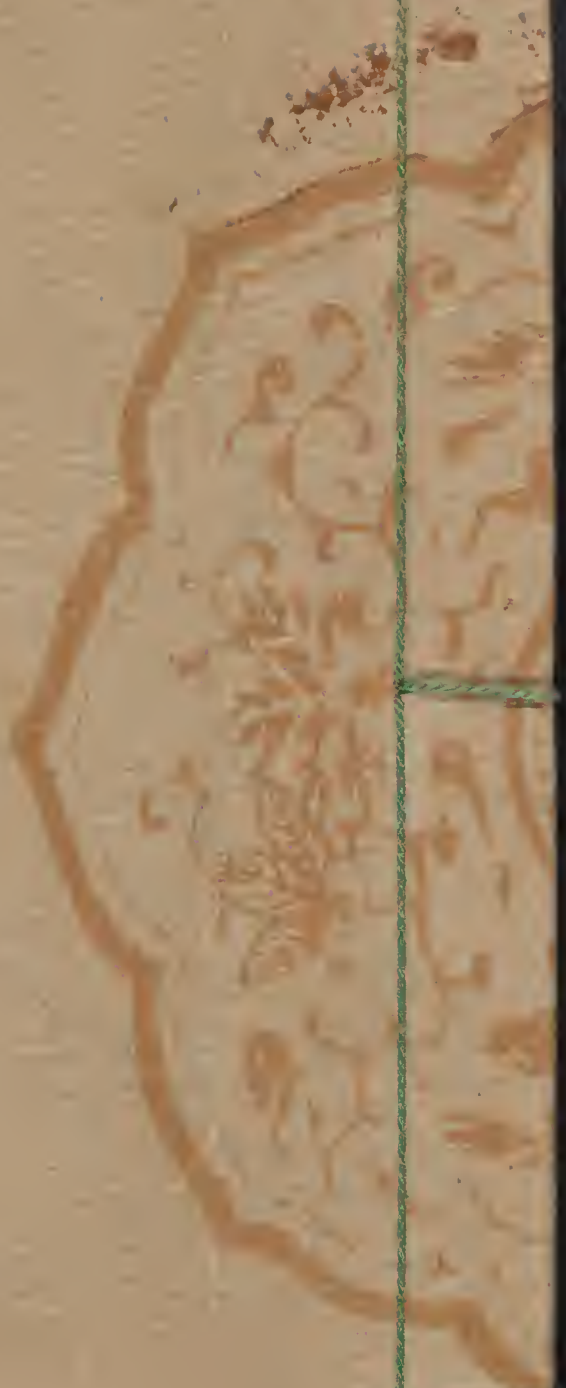
青山御流

活花手引種前篇一

HOYAMA SCHOOL - 5 VOLS.

FIRST SERIES -

411



青山御家御流

桂月園泰雅先生著

活花手引種前篇

京都 大谷津逮堂藏

自序

蓋聞天者缺_{カケ}西子_ニ地者不滿_{ボウ}耶午_ニ方圓險夷_ハ
共屬_ニ乾坤萬物爲其氣被_ニ覆載而自象乎_ニ
其形是以爲_ニ插花之體也高低斜正則南北_ニ
之極長短屈伸準_ニ陰陽之度量以爲_ニ左右前_ニ
後輕重繁瘦之繩墨而紉_ニ本末早晚之等上_ニ
翫_ニ于公宴加_ニ乎佳節慶賀之式下備_ニ于賓客_ニ
之禮夫非情之於有情也守_ニ真保壽與_ニ於菓_ニ

實花葉形狀將資浩然之氣養神慰意乃是花木
不言之妙榮枯盛衰移於四序之變化濃淡疎密
隨于山川風土坦然莫與物爭焉雖告諸人人獲
之未必樂焉耳目徒惛昧于名聞而心身亦奔走
于利途嗚呼人者三才之一而非靈物之長哉頓覺
此意則茅檐數樓坐均于僊界無詰言而緣于神
明佛陀弗學而遊君子之藩籬矣原夫故
正二位大納言藤原基衡卿 公務之暇尤留意於

此伎濫觴于青山流溢于海外嘗羽翼於規準
本諸三教配諸五典其條律全具矣譬言授于人
得一枝則求性而示順逆之理作一瓶則繫乎邪
正得失來由以述善否之故擬禮讓教諭敬和之
道焉余汲其末流奉首肯初設會於延於東都弘
其風於丘里爾來同好數百學習積久略達其
義者居多焉遂承 園公命不擇貴賤士婦
集所插之花狀一百瓶而號活花圖大成往年

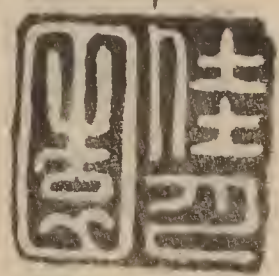
上梓布乎世雖然或其花樣繁茂則意味不淺
而畏初學難辨明於是同社某專欲誘掖容
易頻來從史故再蒙 今園公旨撰其出據
隨大小講增減應屈伸分表裏加之就幼學
所插之體直以摸倣焉省有餘補不足所換之
始末併圖之銀棗備便焉苟將掬 青山之滴
輩勿論都鄙遠近東家務餘力依此集圖學
之則林野之景色河洲之意態迎模於一卉一枝

貯于瓶裏粧于席上觸香對艷則雖暫時手技
其娛豈盡乎斯哉

東都桂月園吉尾 泰雅 謹撰

寬政十二庚申年

孟春穀旦



活花多引種凡例目録

卷の一

○玄奘園條圖繪部分の事

○傳説大要箇条の事

○花配仕振並瓶中若窓の事

○五種花梅同標方並花形の事

卷の二

○磐古花形並並倭澤賣名等の事

卷の三

○即興花振並花配爲の事

○系樹附葉院の具條繪付花形圖の事

卷の四

○同社花形競務園繪の事

卷の五

○松竹園條並名増目録の事

○四季花園振並並遠近取巻の事

○花道大意振付問書並生活挿字義通俗の事

目録 畢

三枝四所能出の事

○凡花枝の一作上三の生とま載相の三枝と居下三隅の生と
ま中央と寄位とるして大小曲直の生に神密長短の生
三枝は所五枝は生七所は生けて出せるの生は神密用
変化とるす之生は奥の圖に依る并明る

花は代養の第一養の生とる事

○花は造化の妙生とるも不言りて神祕の生とる能令生ひ
導き其心とひくむん罪ひく思ひ邪な人ハ別美正生と時ハ
天必是子様と與くむん生とる神佛子捧けて代養の第一

賓客小まめて餐座の最初より尊座の上より座の邊より
るせは候く枝葉の塵砂と拂ひ或ハ雪の茶椀の茶葉茶花
水と取捨水と濯ぎ露ととる世番花は清浄なる一
席上より一籠と取る亦ハ花籠と取る同意ニ

神義と云て花入生事

○花ハ神佛子備一言位美人はまむる座の傍るハ花神義と
可入生事なり一獨樂枝葉の生とる生とるも彼
花ハ三枝の神義あり一花は流つて乳房と合むる殿既ハかの
く鬼神ハ常はまむる其影と影ハ玉ハ宮未きハ次花

もののいふがれはよて必被義と漫をてず

花形正風神を中とてしるす

○次ハ正風を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を
形め又自らの末熟とて悦む或ハ標人の花は批刺を加へ或は
結ハ素花標の素果は拘り名聞は得たり或は素花標を越
是事とて悦ぶ或ハ皆花神の愛む玉所なりて此乃ハ花標の基
一なるは是の趣ハ切老ハ切老素花標素花標に悦ぶとて中

誓古ハ前後の以事あり

○花を中ハ次ハ花標の素花標を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を

花標ハ素花標を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を

工夫ハ其執柄ハ其素花標を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を

花標ハ素花標を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を

二種ハ素花標の素

○二種ハ素花標の素花標を中とて一玉は素巧なる体と好む或ハ素花標を

花は枝葉破きおきやみ葉柄枝末より赤縁て志ほれや
易きおね用うらむ花儀の等小枝くみは傳ふ

掛おす対する花形之事

○掛おす対する花は餘の貴美とまゝして花は是は唯ふなり
依て葉の青葉ともふ所は勿論統く様様ながめ葉柄は赤いさく
居るさく形り花末さくおひ隔る類は急し花枝葉柄を
白地は隔るは様更なり此外は傳ふ

書院中鋪向と茶室の花は不同之事

○書院中敷の花は別處の儀なるは
茶室は茶室の儀なるは

番物も亦是は唯は茶室は唯は茶室とまゝして
是ふ花も是は應るなり

花見する時の事

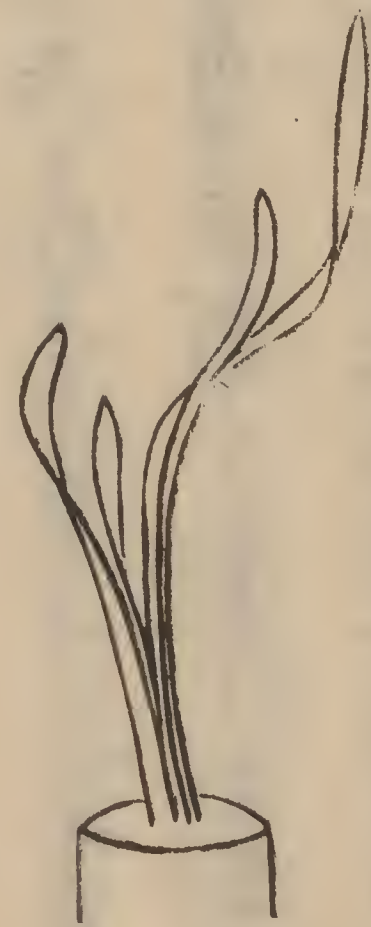
○春は鏡まゝ花は中よの草果は物さく腰の物
所ふ花より二番程隔れてるなり又此は
下へては但集會席に坐すは茶室の
右十六箇條は傳ふの内僅は十二と被りて其
流の奥より探ふなり

流の奥より探ふなり
傳ふなり

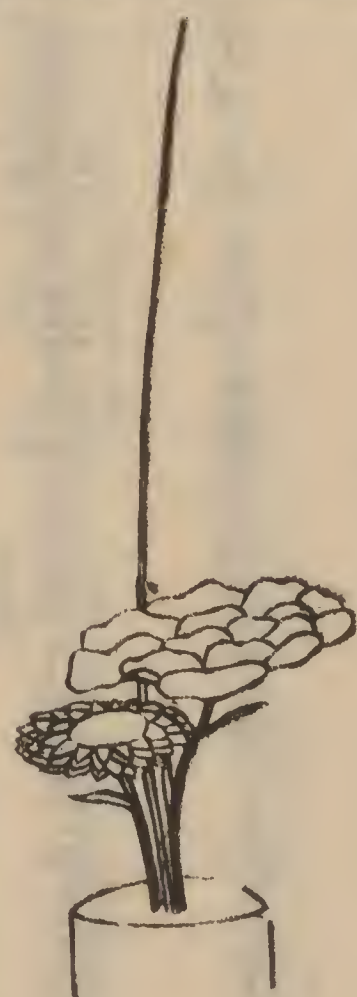
十一、条々嫌いの図



葉ある物とかく花なりきりなり、但
花平居てやむことあり、杜若を人呼ぶ
ちや、萩の葉杯の水也、物とありて
補ふ、若くしき



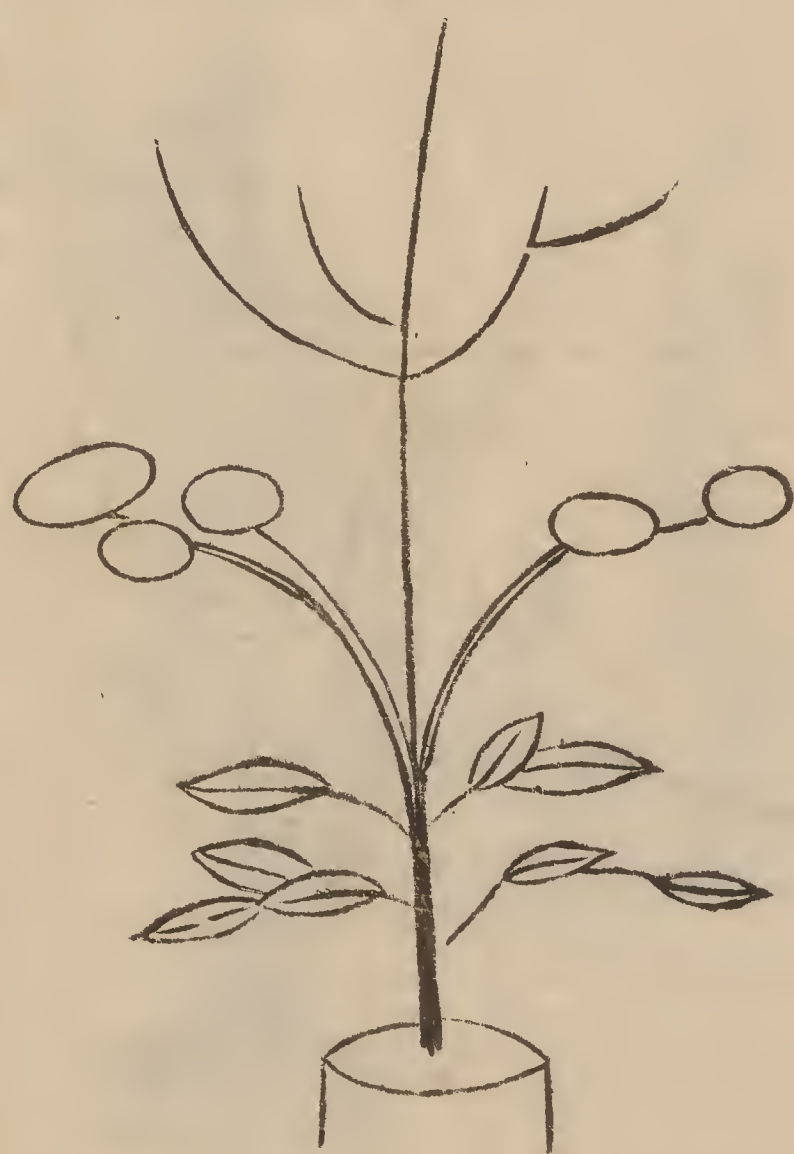
わく水仙も、花の葉の、こゝ面白、
おも、花を、花を、花を、花を、
或ハ花束、花束、花束、花束、
終て、後、花の、花の、花の、
等ハ、あ、い、杯、水、杯、水、



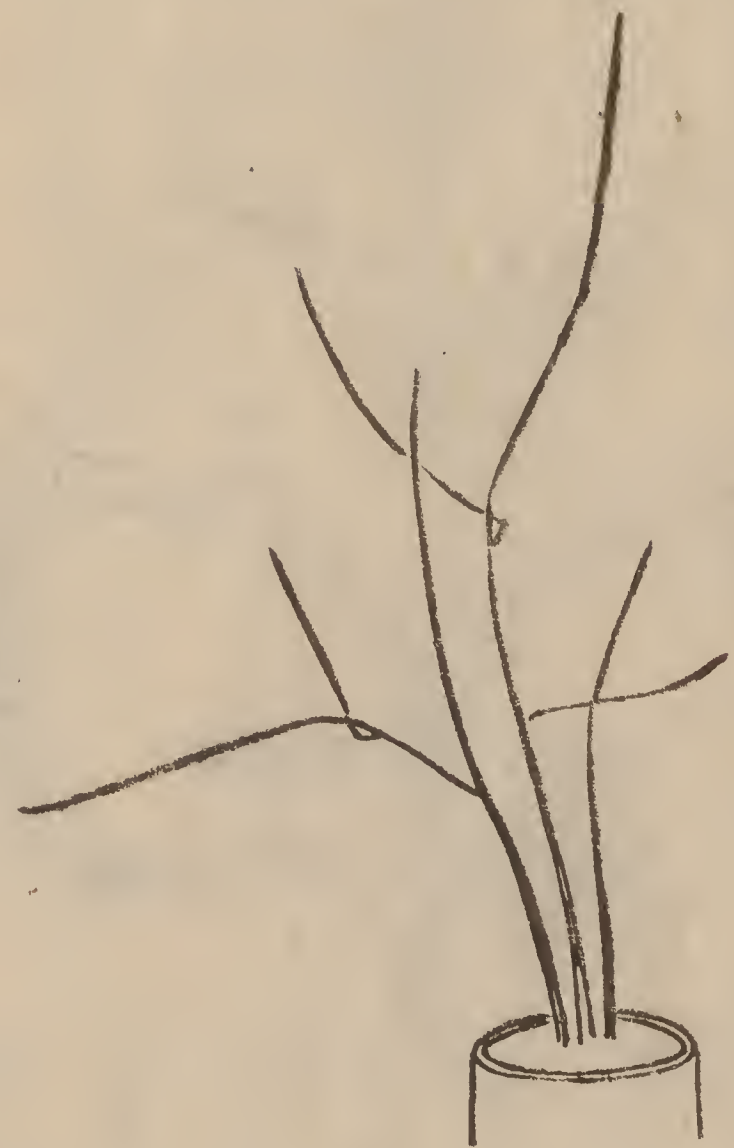
かく、大輪、花、花、花、花、
友、葉、ありて、甘、甘、甘、甘、
又、又、又、又、又、又、又、又、



何小限、花、花、花、花、
小、長、と、と、と、と、
但、一、方、并、入、入、入、入、
若、一、か、次



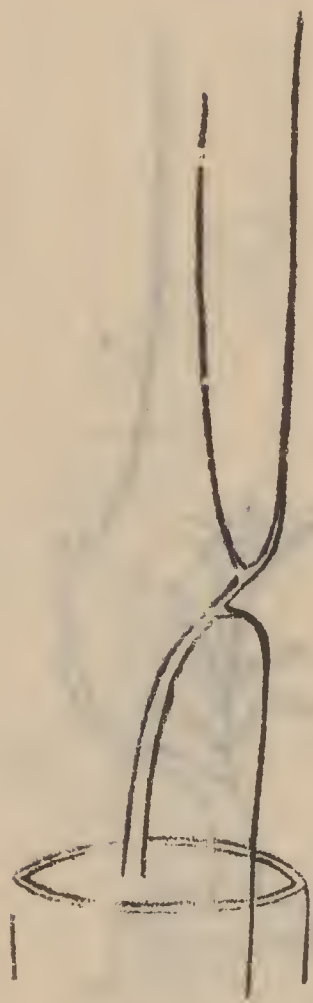
あ、左、右、同、所、も、出、て、引
張、き、き、き、き、き、き、
但、厚、薄、さ、さ、さ、さ、
右、長、短、さ、さ、さ、さ、



かく見きり十字字不置ハ
 忌し但友枝の元て聊
 とまり或ハ目まゝぬ小枝
 小紫ハ若くは次



かく鏡のぞく花葉枝
 平よとゆる事忌し但
 至く小葉小枝ハく
 かゝ



かく前後もく出るとる
 冷すしとく踊ふなり但
 冬もくくふは
 若くは



新花紫山よりとる或は
 うさぐさくさくは
 但そをく興いもて窓の
 ちりつりかひは若く

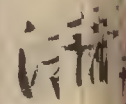


かく月の静まらハ
 ちりまらるる若く
 あ

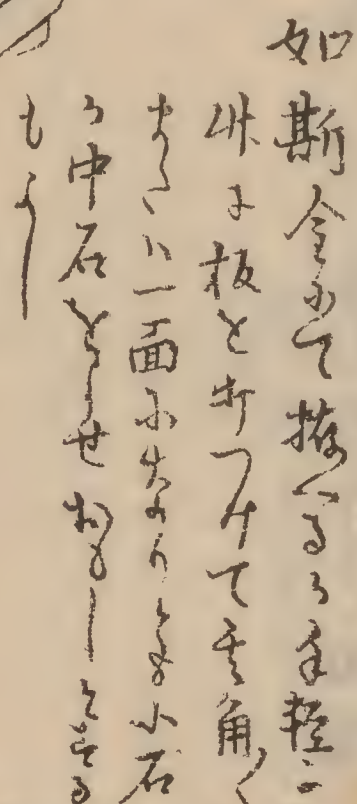


五

わきまなく、行列鷹行
掠杯のゝゝゝゝ
但前浮上下の凍沈あれ、
苦ゝゝゝ



此



中より小薄板を入
是より出く小砂
利をかき出す

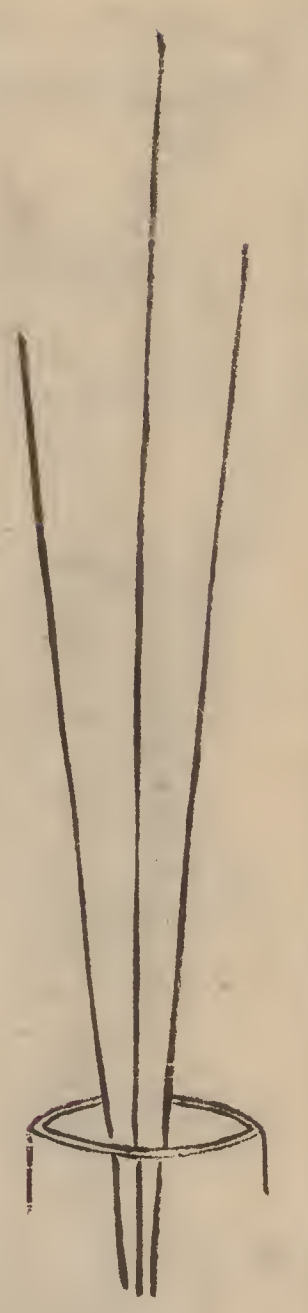


あゝ前より遠く廻り
ふかき道より新へ
みちのききしもの
細くやうやくは揚と云へ
さる一所までわむハ

次

右是近ハ初禁士ヶ条の
太嫌ハの部ヶ也

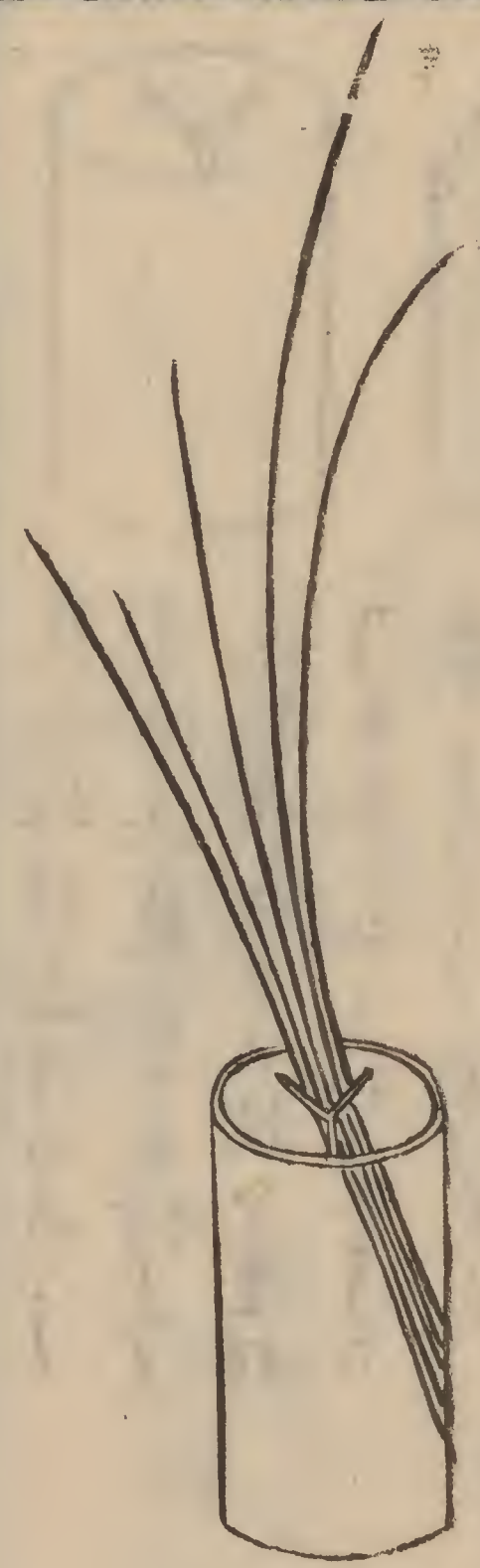
ナ



くさくさ直形の子えく
ちねーちねーちねー
か直ちのハ又添へが
可事も程あり



かく本末くさくさ
さくさくさくさく
がくさくさくさく



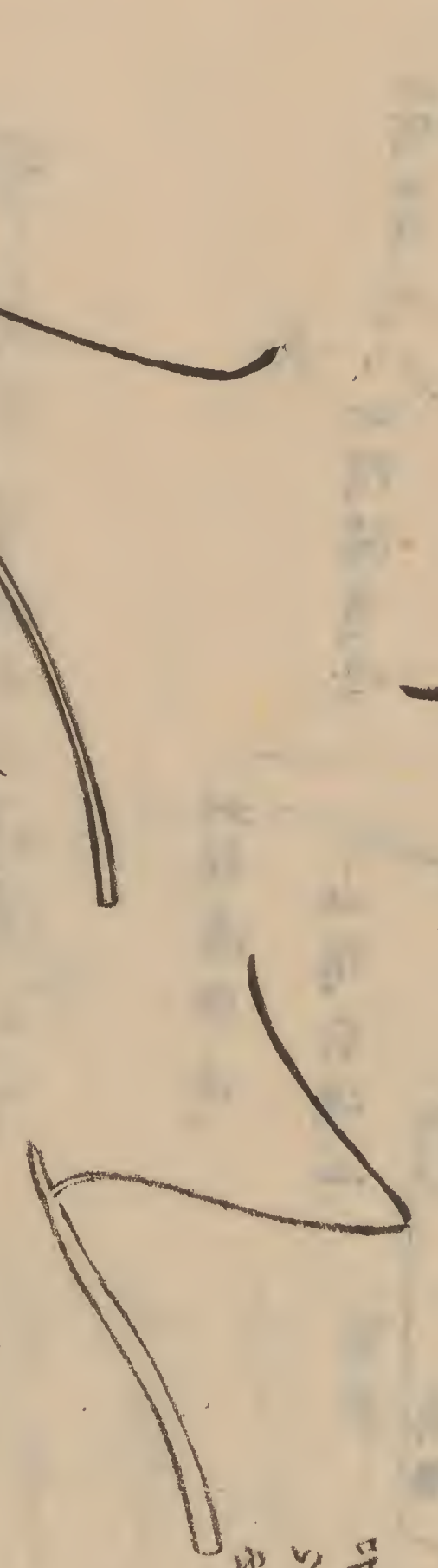
かくのくさくさく
くさくさくさく
大小曲直水中の
めくさくさく



斯心ハ假名れくの字のごく
居一但強くけく居り
くハハ圖根と割

かく戴ハの字れ

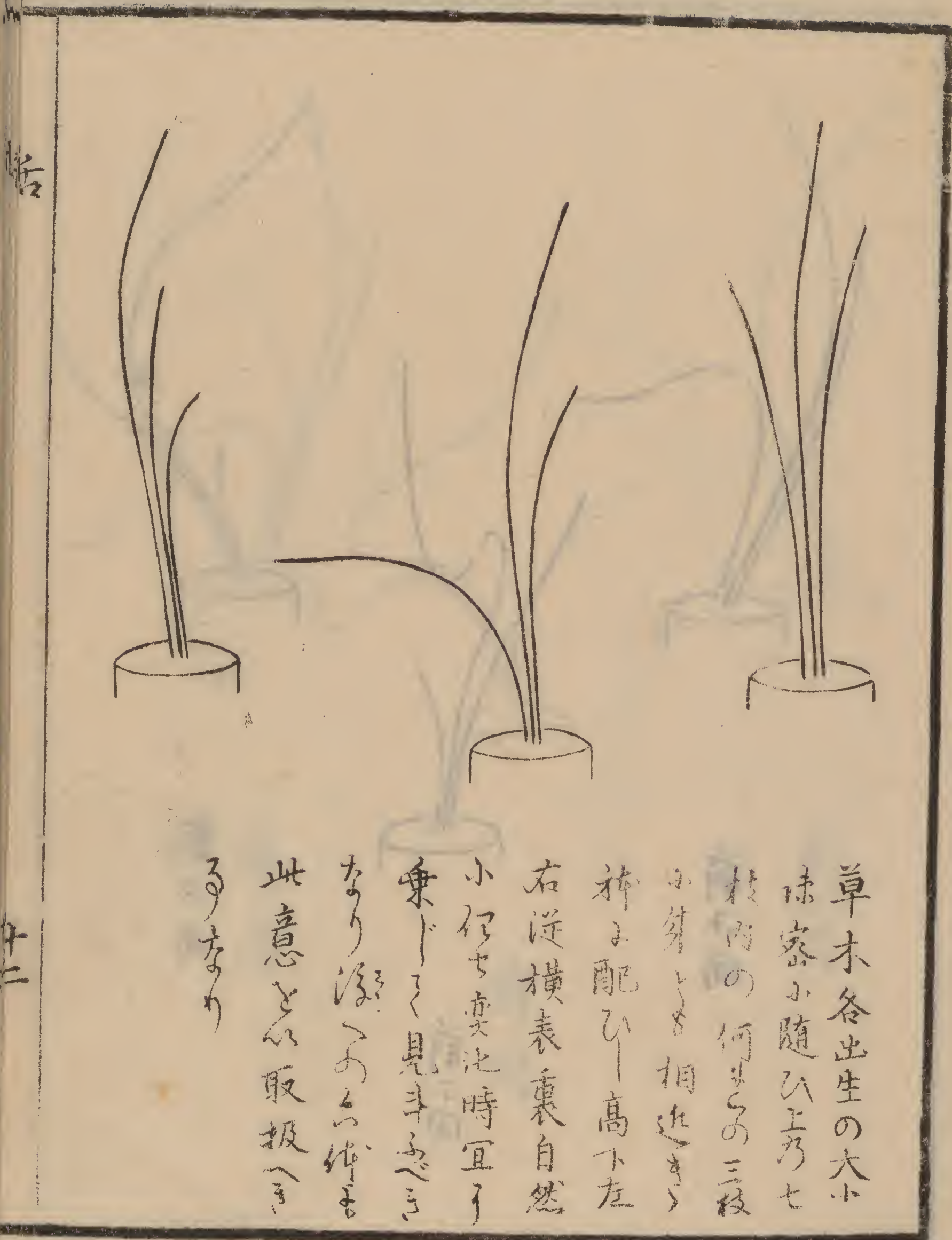
様むさく



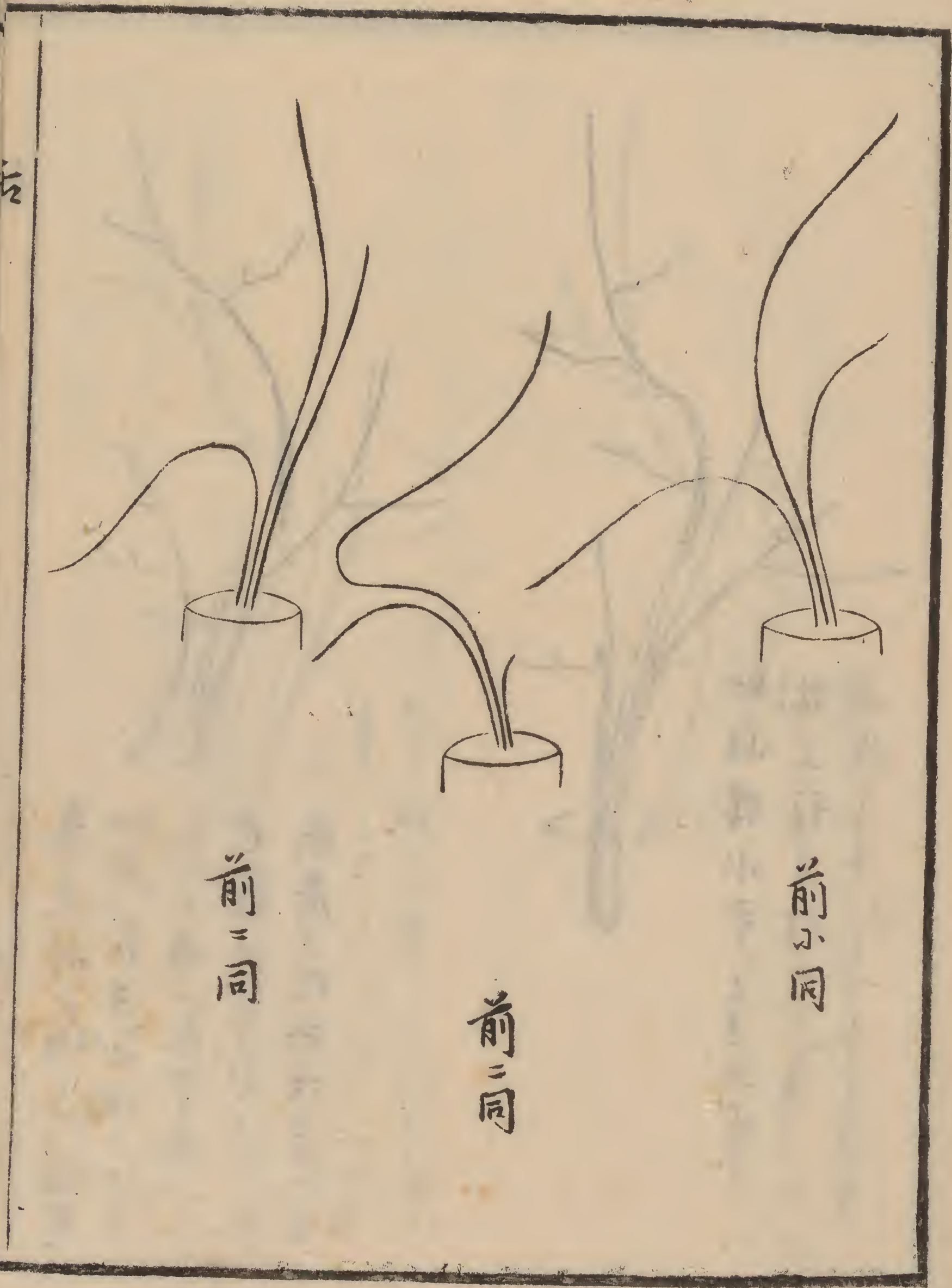
是オハ様
くさくさく
くさくさく

かく植横きく行
近いて直小きく
む時ハく居り

圖の所の七枝ハ花葉枝の多少長短小随ハ縁屈伸ニ應
 三枝小配り五枝小より或ハ七所小備小尚出生ハ模
 臨て魚帶増減小ハ得傳あり



草木各出生の大小
 味密小随ハ上乃七
 枝内の何もの三枝
 小算とも相違あり
 種小配ハ高下左
 右逆横表裏自然
 小何々更此時宜
 乗ド見斗ふ
 なり流ハハハハ
 此意と取扱ヘ
 るなり



草木何子限す根茎
 如斯右注左往子ゆ
 えり時ハ水中あく
 水際添けびて花
 形居る次尚次とて



如此腰水中ともふ
 梅ふ様子揉て入る
 水際ふきいへるも入

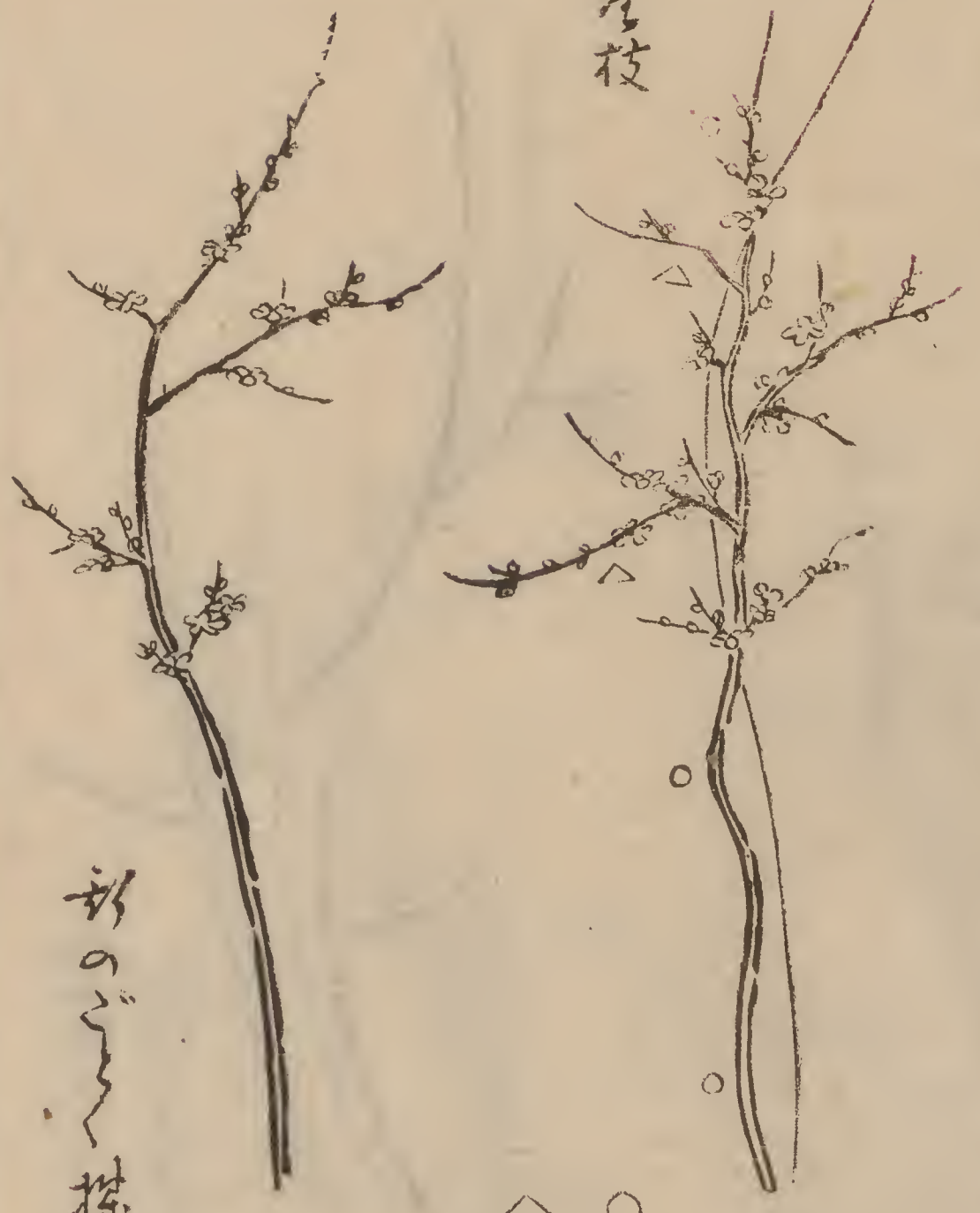
如郎大小く揉ふといふも
 根茎なる水中とありの
 如左の通揉う



かく揉ふなりとれどもふ
 ものいふえうい
 水入る所を揉み抜め
 入る人ともさむ
 水よふくくふれ

右五種の花枝、搦方、八極、橘、棠、牡、水仙の五種、是れハ世ハ多く
 然モ盛リ久シ、四時モ傍、以テ後、ハ依テ、活、系、の、取、上、ハ、以、又、方、ハ、小
 う、地、ハ、さ、り、ア、ハ、れ、ハ、当、流、ハ、此、五、種、の、替、を、以、テ、余、ハ、此、五、種、ハ、
 カ、ハ、以、推、テ、之、を、搦、方、在、の、ハ、

老枝



かゝるの如く搦

○ハ搦む系のより

△ハ勢ハ余ハるより

新のどく搦心より

老枝



新のどくは通搦

新搦たの小月

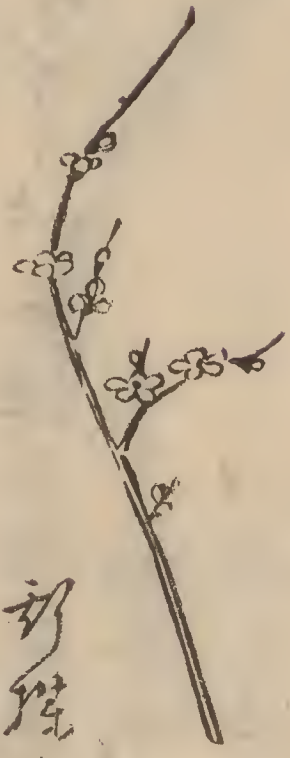
老枝



かゝる下迄搦

右三枝ハ

以テ出す



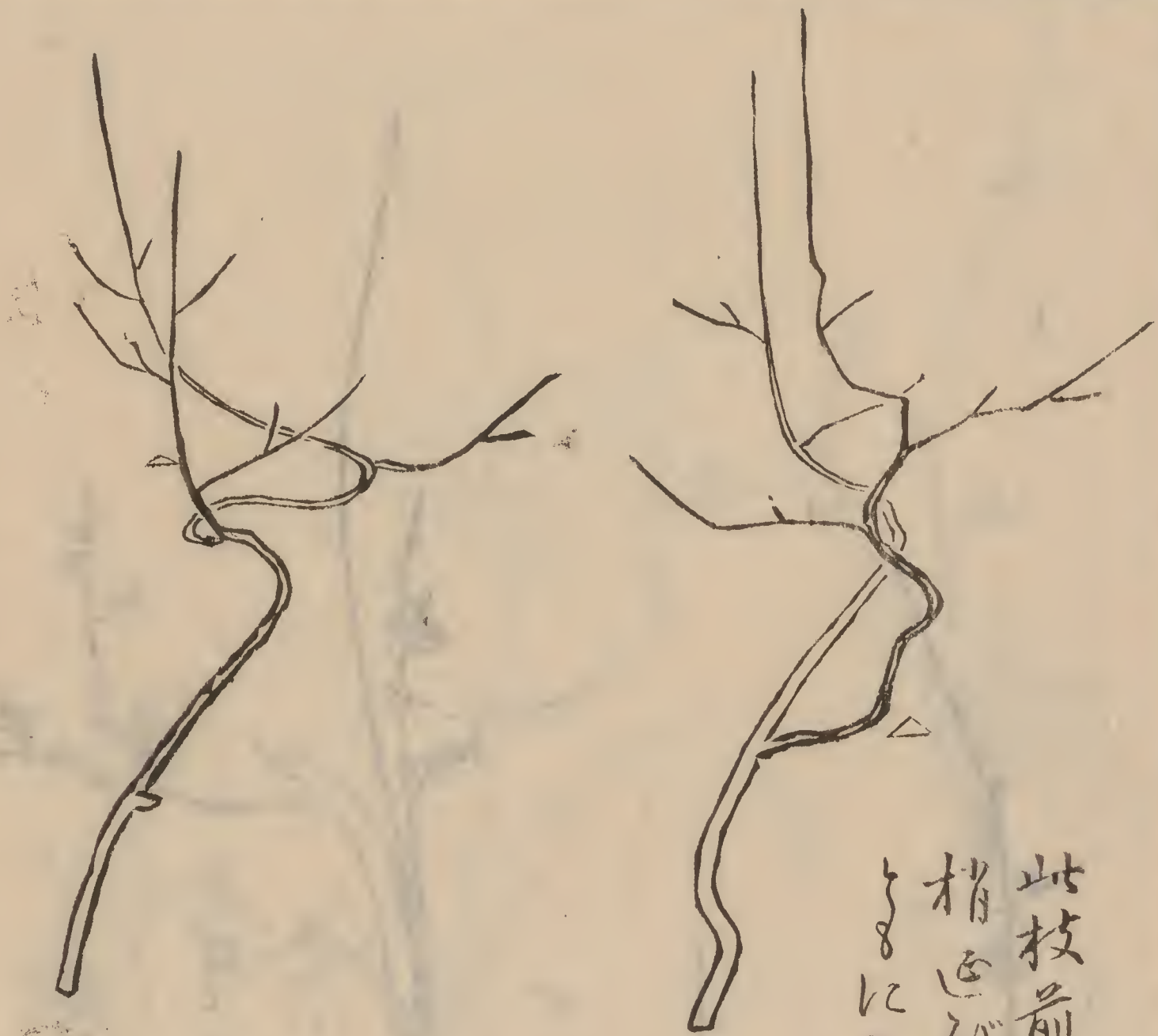
新搦より

相ハる

右三枝より花壇如斯に入るとなりそれ外自然なり
 葉一葉不値い変化ありけし趣梅のみふあざ諸木あは
 せし物とのく回さるなり



此枝前の方曲ありつゝ面白けれど
 梢迄びてくねりれば漆へけり
 ともに急前と除て向き



此枝後の方頻り屈
 曲ありとも腰伸て直
 形なる前の枝を除き
 たりて外何ふ限る
 此意を推す



かく横へ出る太枝を左の
 水に入る所より小枝の出
 所を採て細くしと云ふかゆ
 形を大小変へたり

印の所を採へ



如此の枝もきつて
 置あゆみハ左のご
 変なり

印ハ採る
 所ハ余ハ是
 准



椿ハ、めく風情たゞやに葉並の
 薄く、ゆゑハ急に遠くまで
 繞る椿ハ、木あつて小枝小屈
 する形おもふ所、何れ椿小
 相おもしろいもの
 各同意あり
 次乃、枝方の重み
 別枝は
 卷小マ



如此所、葉繁く、
 多々、枝屈曲し、
 水際、摘み、
 物たりと、あつて、
 三本、つゝ、
 五本、
 得、

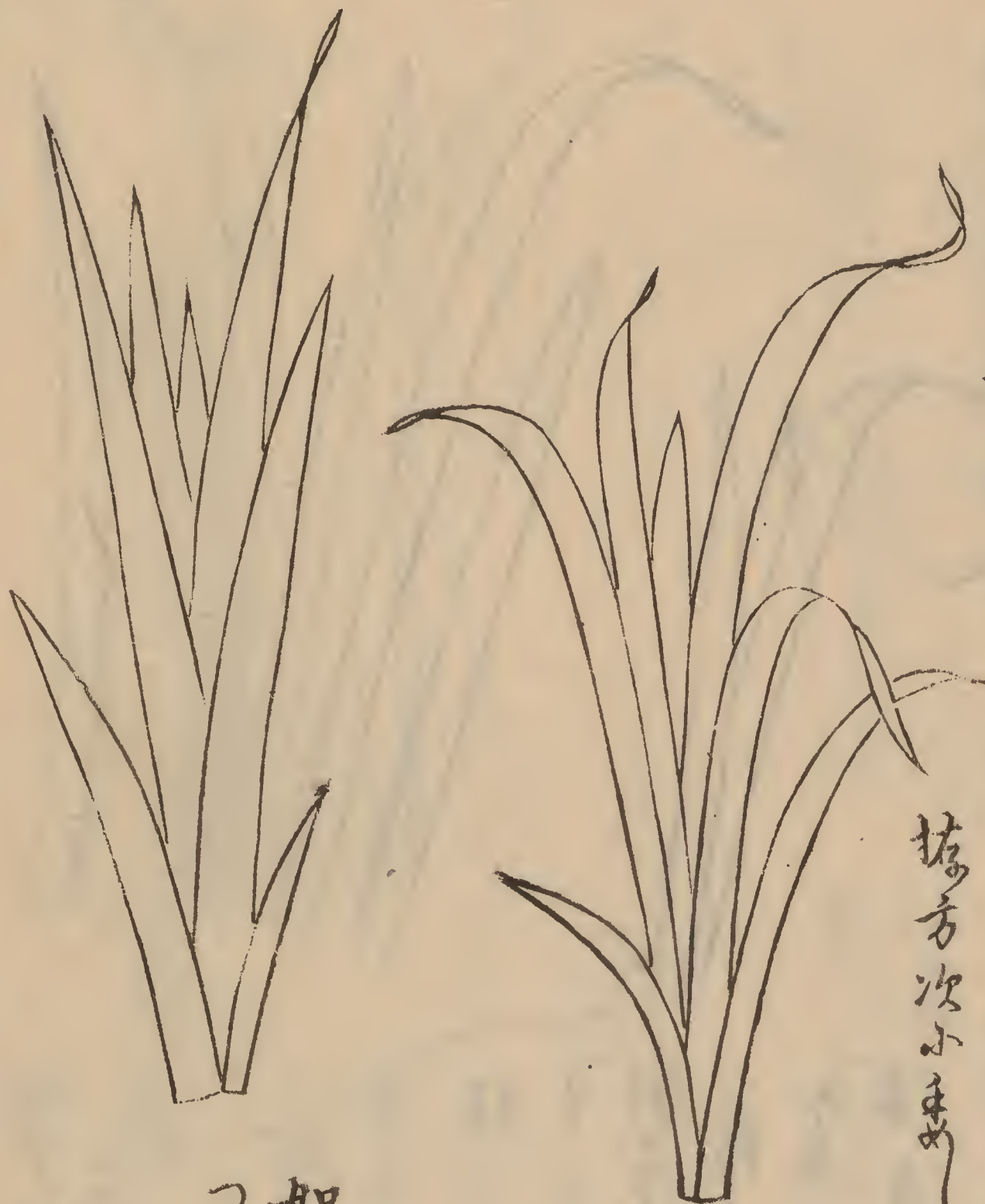


如斯椿ハ多分三枝の
内二枝ハ産ムて無帶
々々々其外ハ小枝と
ありて小添事
別体奥乃

春小多



如此枝うろく花葉のそ繋
多患く取捨うろく花と二
輪小強々葉と五ふれも残
一左の通あんをいへ入るは
茎とけり葉と厭
時風情悪一根も
印乃所
剪る



如是元より真直小
つゝまゝなる葉宜

牡丹の風情ハ姿ハ葉ハるなり圖のこゝに乃葉ハ繪形そへ
曲るゝ面白げなれども花ハ取合時を葉先をみれば
惡し左の如く形ゝるゝ葉の直なる小ふくべゝ次尚葉の
植方次ふまゝ見え

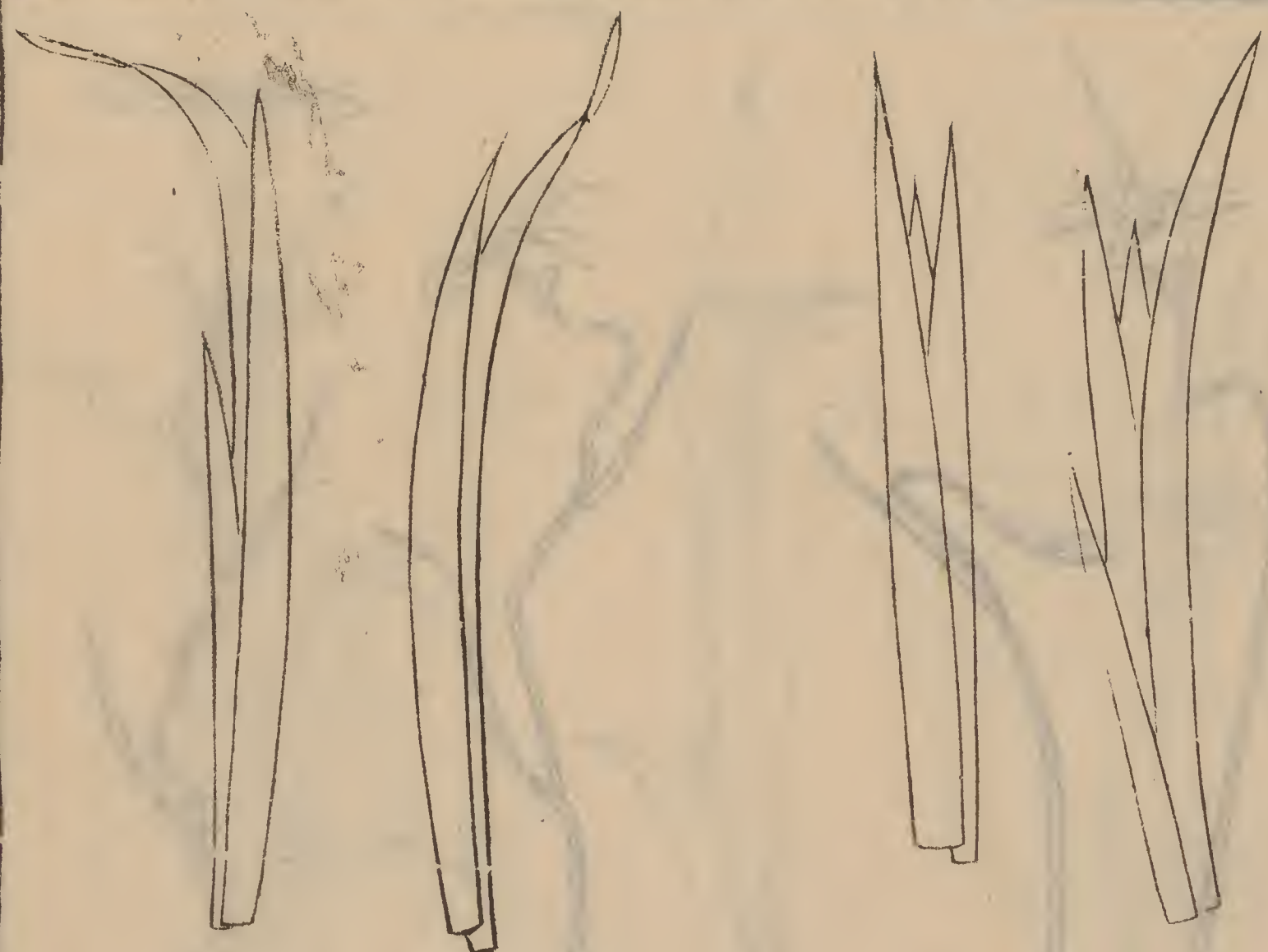


如此ハ懸^{かけ}瓶毎二
重杯專^{せん}り又
置瓶乃ハせ杯ハ

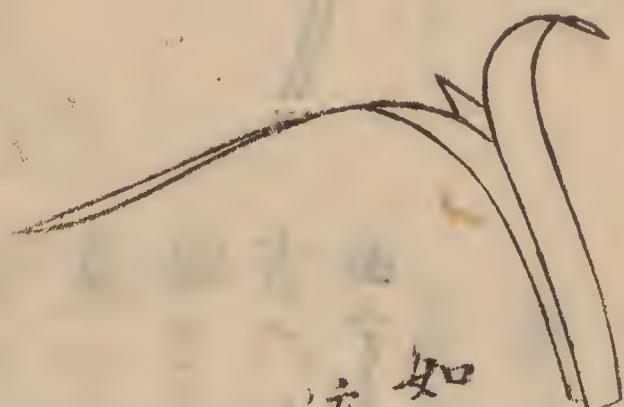
如此ハ二瓶
古小内外の
漆方ハ
鮮ハ是ハ准
屋



何き産の休めて遣
やうきふりうきふ
はくなくふ圖の如
一枚宛もふちやう
左付通長短恰好能
様子二枚あても三枚あ
てもみまうとせと元
乃ごう組合ふ一最初
ハ致一がけきでほる
か易出来るる方なり
事多し



斯三枚も四枚も但たり
多々中とひさくも場所
相應ふ見合る一左乃長き
葉ハ心の冠葉け但なり



如是の葉ハ懸瓶
添瓶ふよ

あむり葉
くみ方



花も曲有る面白極らん
 斯本末亦ふ急く移り
 て必水中水上亦小舞儀
 なり想て杜若の草ハ急
 通り小ハ急めたり
 物なり譬本直りて
 左の如く末のいふは
 曲りハ葉小添ふ
 かまて順く曲
 りまハ葉添ひ
 湯しやうわ
 容も出来も然
 尚遣方奥ふ
 何き杜若の草
 直きハ葉小添



右の但葉小直形
 茎と交り如是
 遣る
 二本の挿挿変化
 数多あり流巻と
 見
 三本遣前小
 同

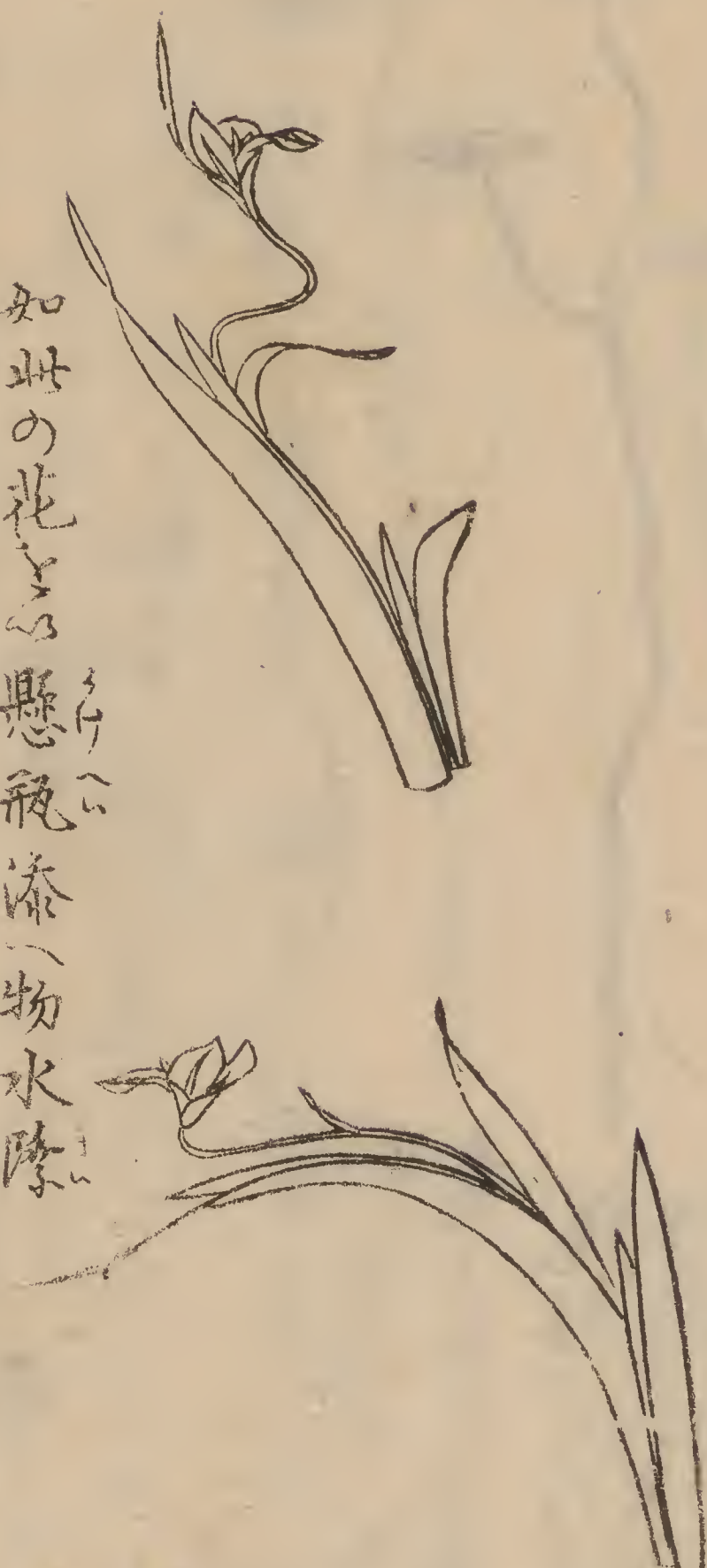


三本遣左勝
手別体浮卷
君一

曲花遣方
別種後卷小
數瓶あり



右以同
別体奥示



如世の花と懸瓶添へ物水際
庭より採りて置くなり

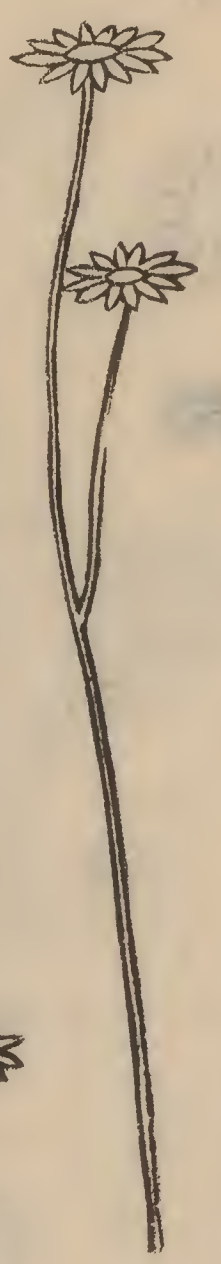
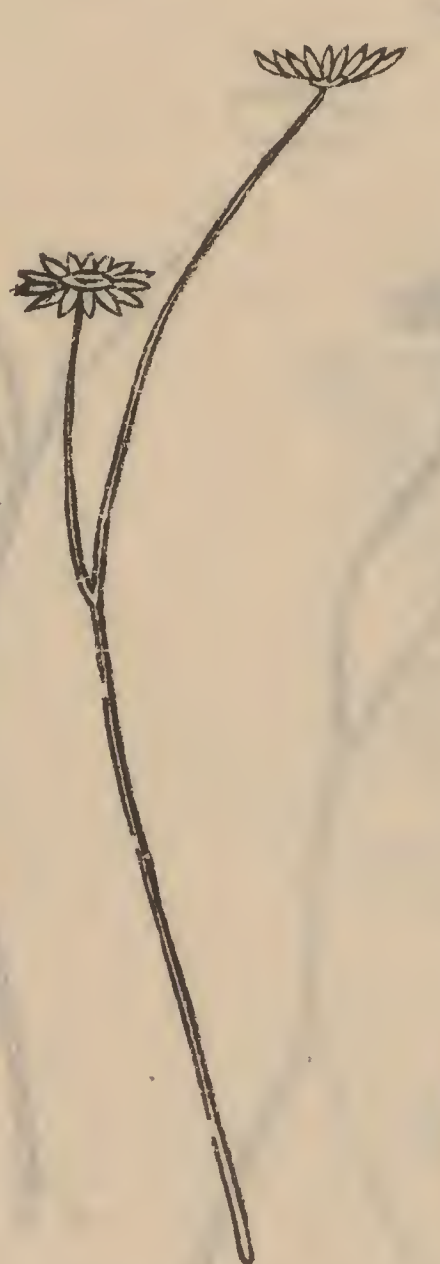
大菊ハ作り方乃功者不功者ナリ 然外曲直ミエトモナリ
 唯活花ニ直ルモノト專要トモナリ 圖の如ク様々
 々曲リ或ニ物三ツ入ツル枝乃モナリ



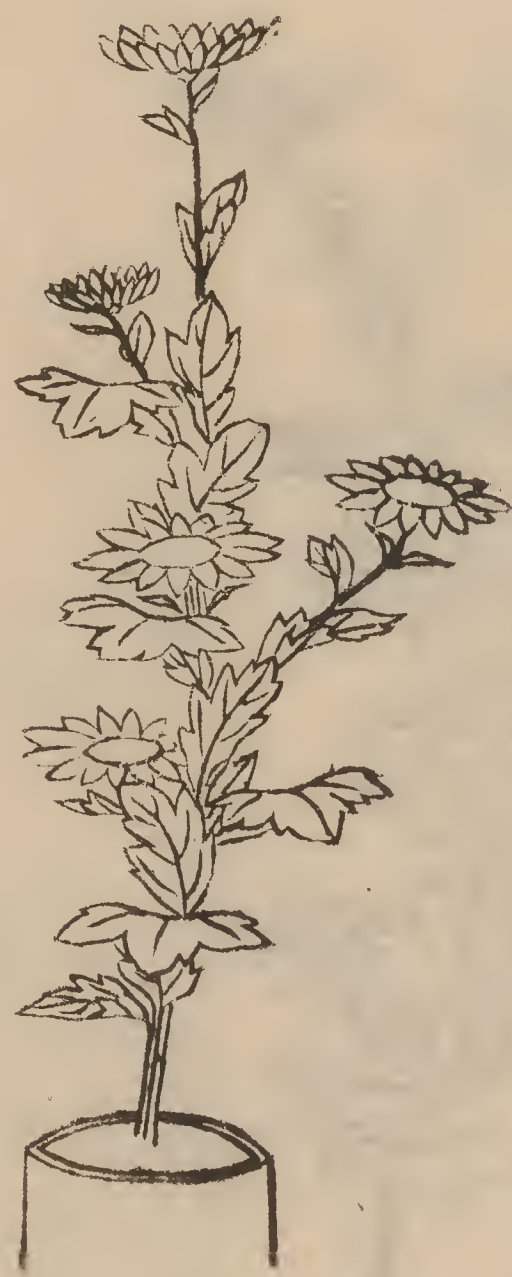
但中菊ハ菊ニモ呼ビ
 ノ供テモナリ 然レ
 魔ニモナリ 澤山掛
 籠掃ホトナリ 入
 ナリハナリ面白

風情 ありあり
 活春と云

如此のえハ直ルモノ
 枝葉ニ開キテ外の枝
 ナリ



斯花長絲ノ枝乃
 ナリハナリ 然レ
 出ル付ハ何條ツキテ
 各用ナリナリ
 活花ハ志スル人菊
 ナリハナリ 然レ
 活用ハナリナリ
 ナリハナリ



右小同



右のこゝろをえん
枝まで三ふん五ふん
七輪めいも時宜し
て入るうき花
奥の巻もあり



かく茎の曲りきり
各図乃ごころ
直一、開ゆ、最初
このうちハきむれ
とれ、捻りハ全葉
枯るやうもれ
まゝ、たふれ、折る
もの、尤節と除けて
捻る、こゝろ
但是と揉るに五練一
紋の口傳み、必
折る、こゝろ



右一掃つるまゝ二掃つるまゝ
 交へて如きは尚別体
 後卷ふ多しといハ唯大通の
 一方といふ



かゝる瓶花は十か方ひけて
 入るゝもさうなれど一尚
 難折のゝれ咲か別てゆ
 小菊物も同意なり

作てゝ中菊
 か澤山小入
 る形累り押合
 たり



秋の小菊乃大凡

夏の小菊は
大凡



秋の小菊
室の片

夏の小菊
産のてい

水仙あふくわれ魔く直と形ハすく形くものなり
 中より出せり葉の腰弱く又ハれしてなり
 最掛瓶なりとふある葉とつれて強

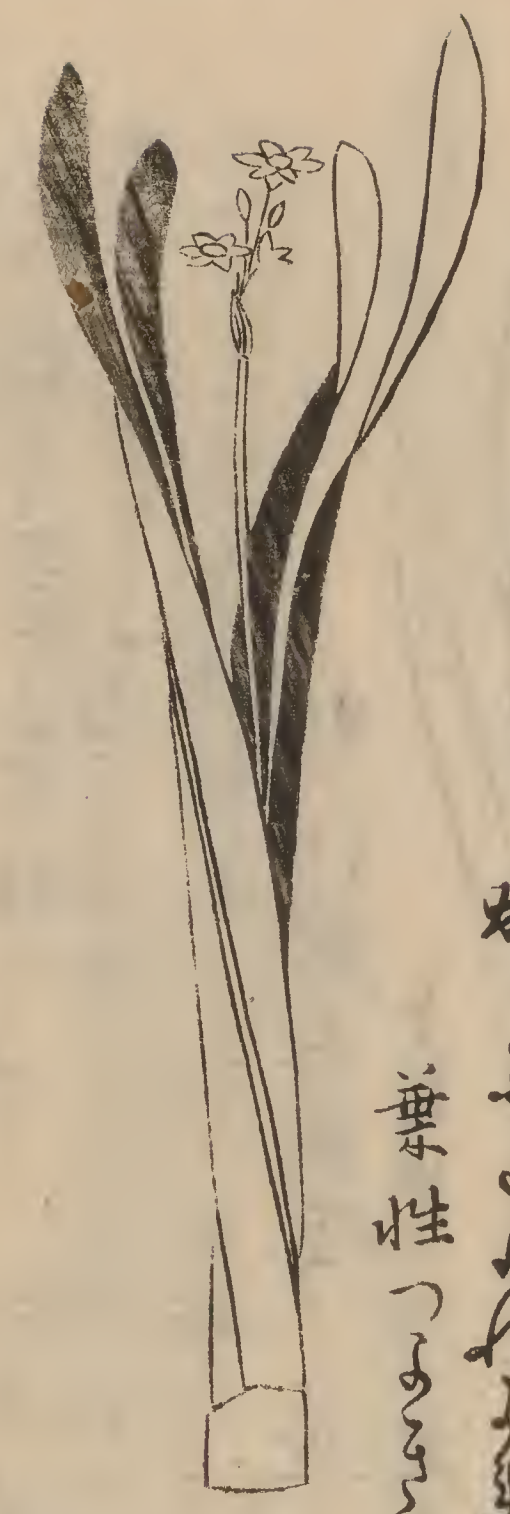


二もくくい入るあく格別金瓶を
 大高く敷と
 入るあく
 次の圖はく
 直なるを掛
 用ゆ大
 美忌のあ
 事

如是葉弱くあふく直なること
 最上と次考へ合て茶ハらみて
 のびざるようし



あふくわれと次
 葉性くあふく唯ひく
 挿すよるなり



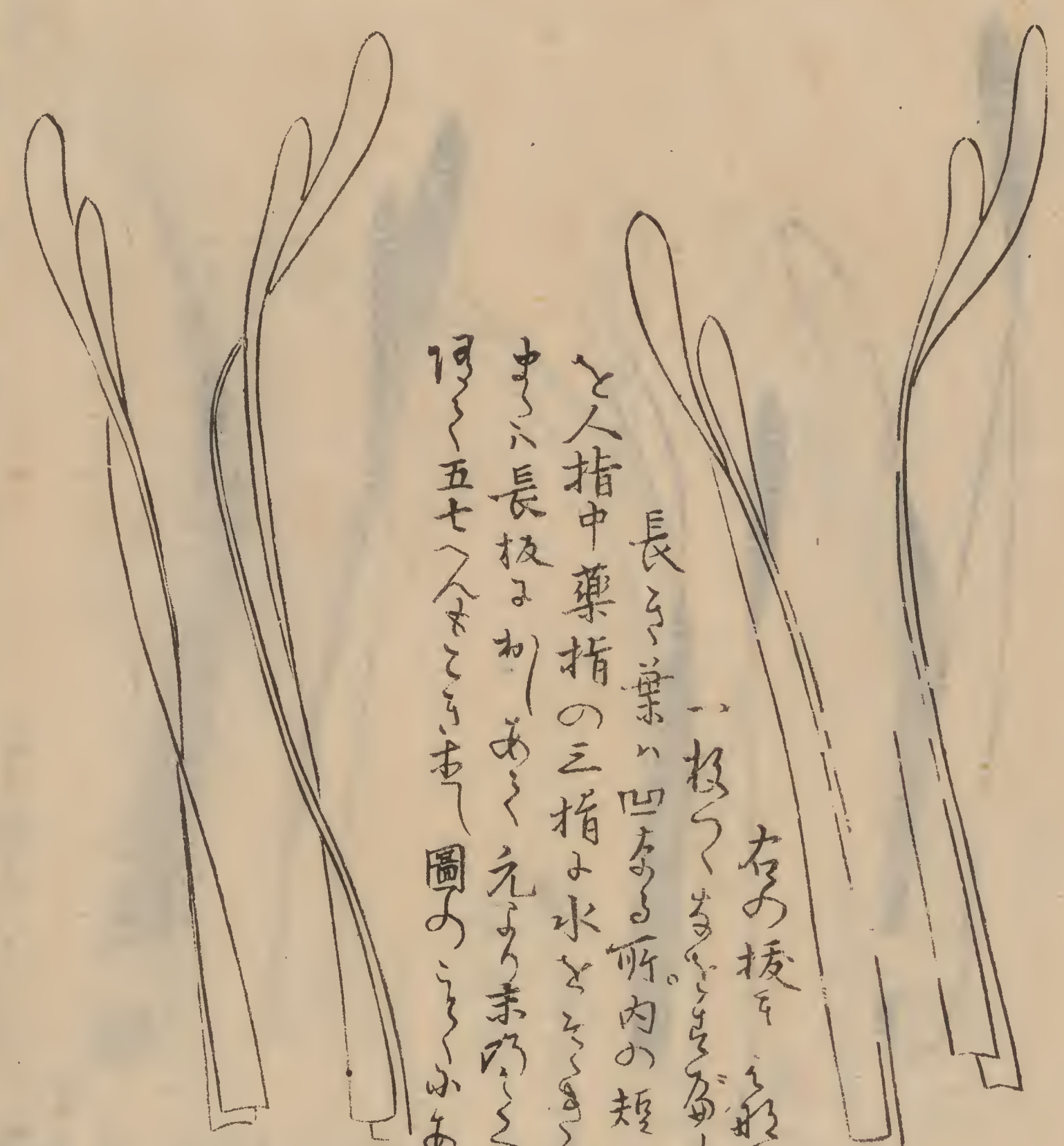
水僊葉指ハ右の一茎と取あげ白根の所を静ふも
 と又ハ根りてそ茎根とやうに先花とさうなぬ
 夫より葉とさうなぬ一最性二枚づゝあつたり
 以て多分ハ茎と始終あつて用ゆてさうハ花を
 かり器又ハ曲なる棒と遣さうと節ハ

さうゆゑハ破さうと採よのき

とさうハ花を
 ぐうけのり
 節ハ三節ハ白
 根とす小なり
 於て



右の拔き
 一板つゝさうなぬ一但さうの
 長さ葉ハ四角の所内の短さハ品の所
 と人指中葉指の三指ハ水とさうなぬ
 中ハ長板ハあつて元より末より葉の剛柔ハ
 何れ五七ハさうなぬ圖のさうなぬ



さうなぬハ
 葉ハさうなぬ
 用ゆて一但葉
 余りさうなぬ
 色ハさうなぬ
 青色ハさうなぬ
 艶さうなぬ又さう
 起一極口傳多

三ノ葉



三ノ葉のふやう圖のめい
えとおいそいで

三枚合せし長き
方の葉をいふ
三ノ葉と云ふ花
ハあつてこゝに

まゝめやうの
長き葉より
一枚づつむ
ちり何葉
梅ハこれ同様

三ノ葉

三ノ葉



葉梅ハ如是ひふれど
最上と云ふなり

斯ニよと云ふハ下より
茎形浅

うしろ梅ハ
かたやうなり
一めつなり
後と云ふ

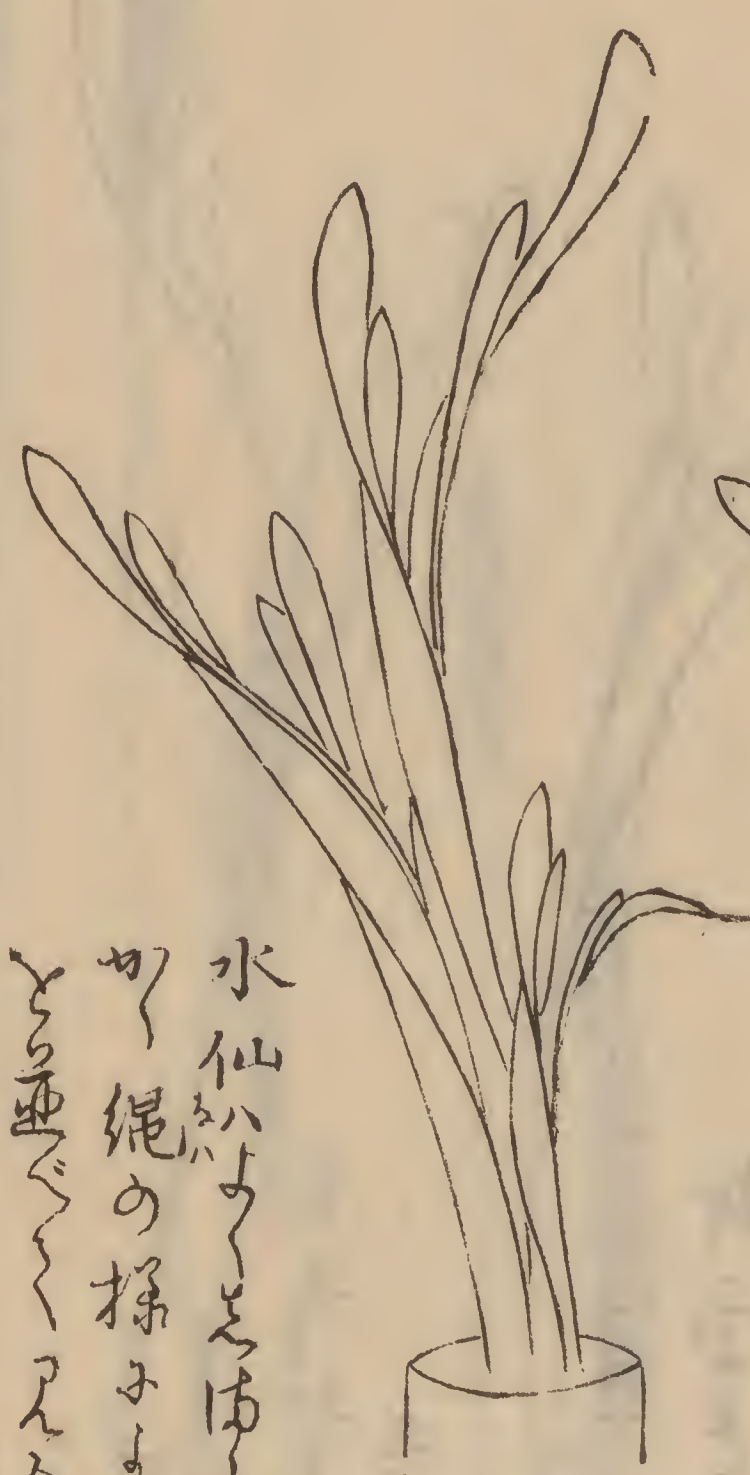
三ノ葉

水仙の葉

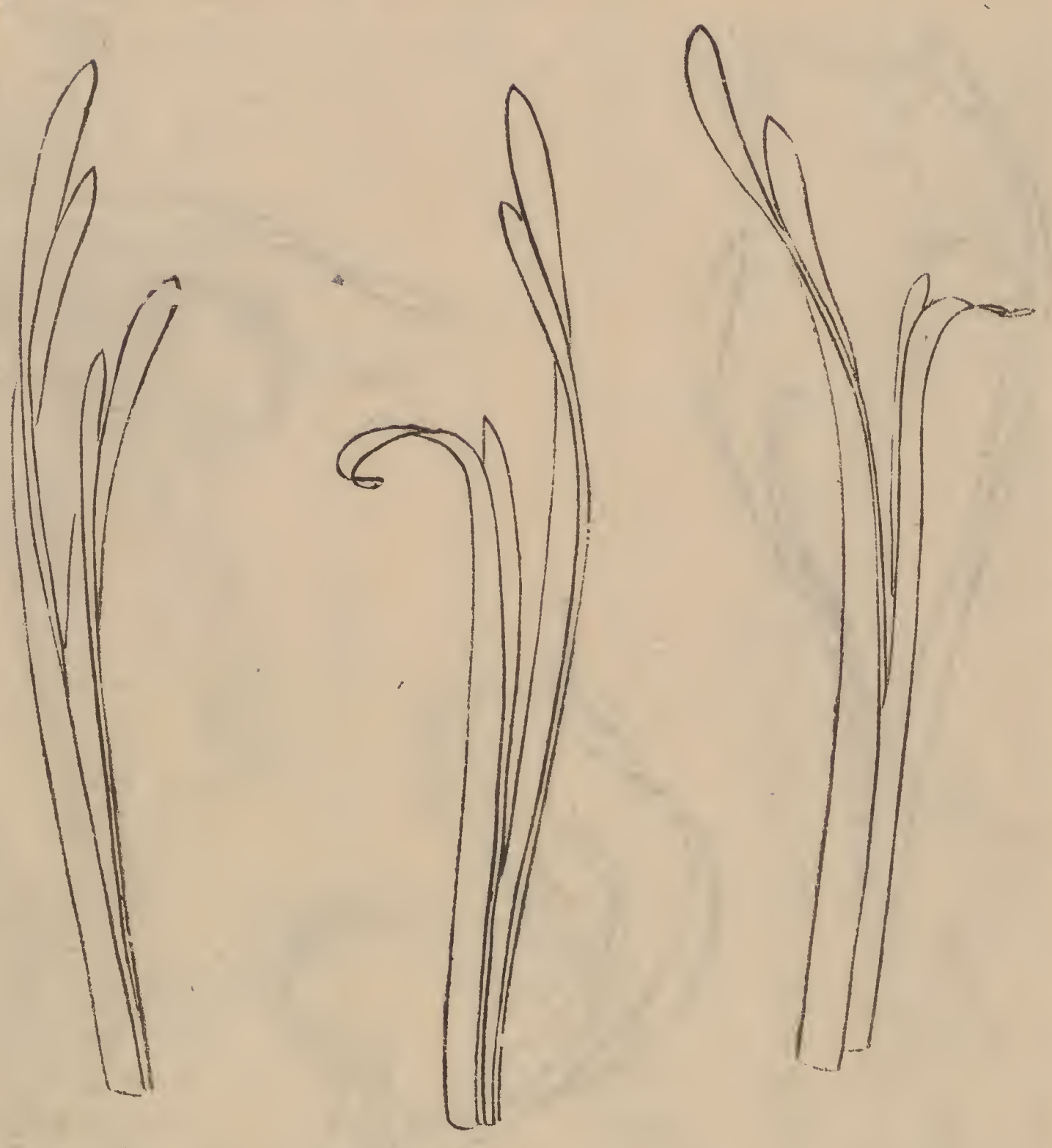
水仙の葉



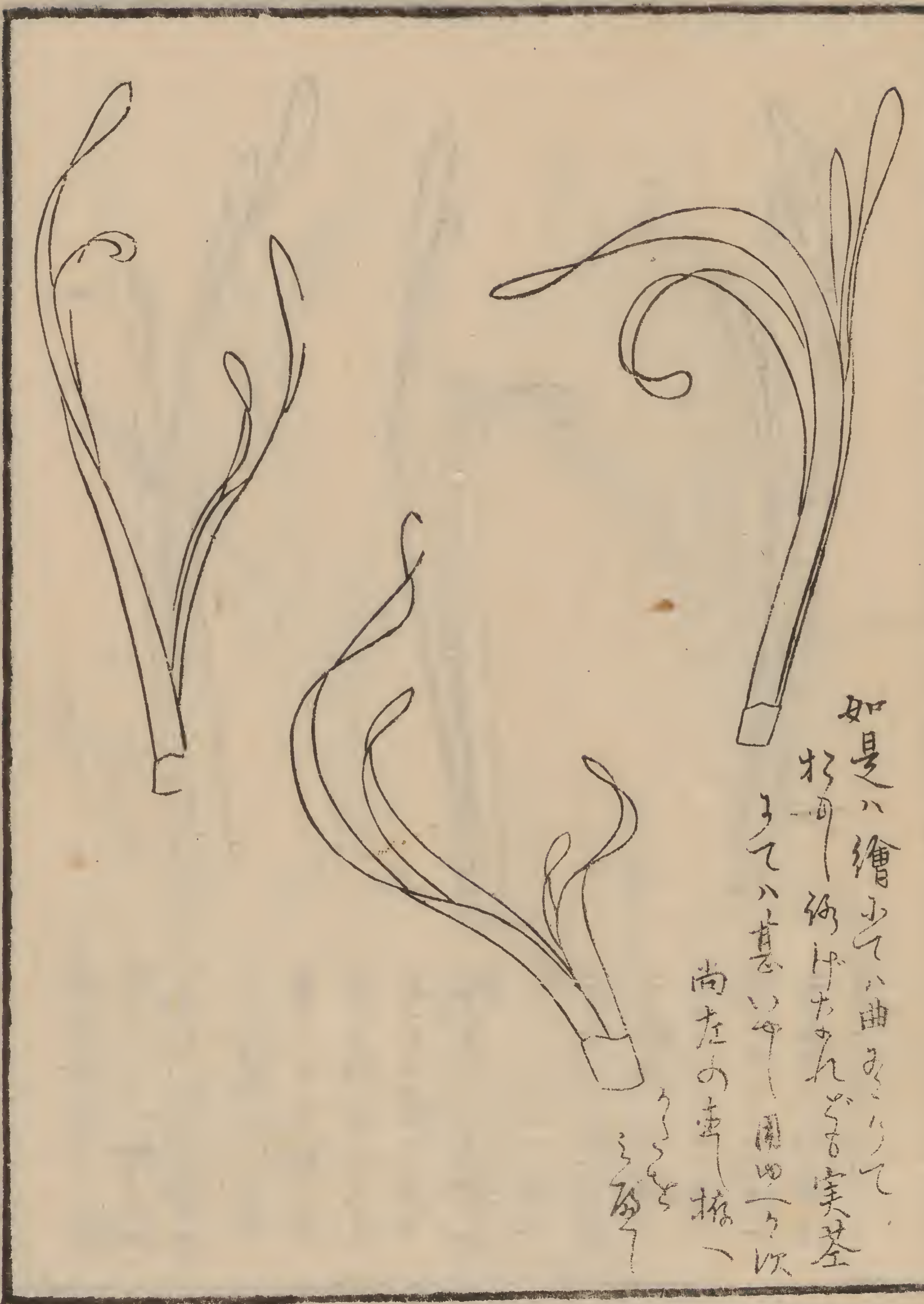
茎葉がふかくあつちやうに
く乃通あつちやうに



水仙はよくあつちやうに
く乃通あつちやうに



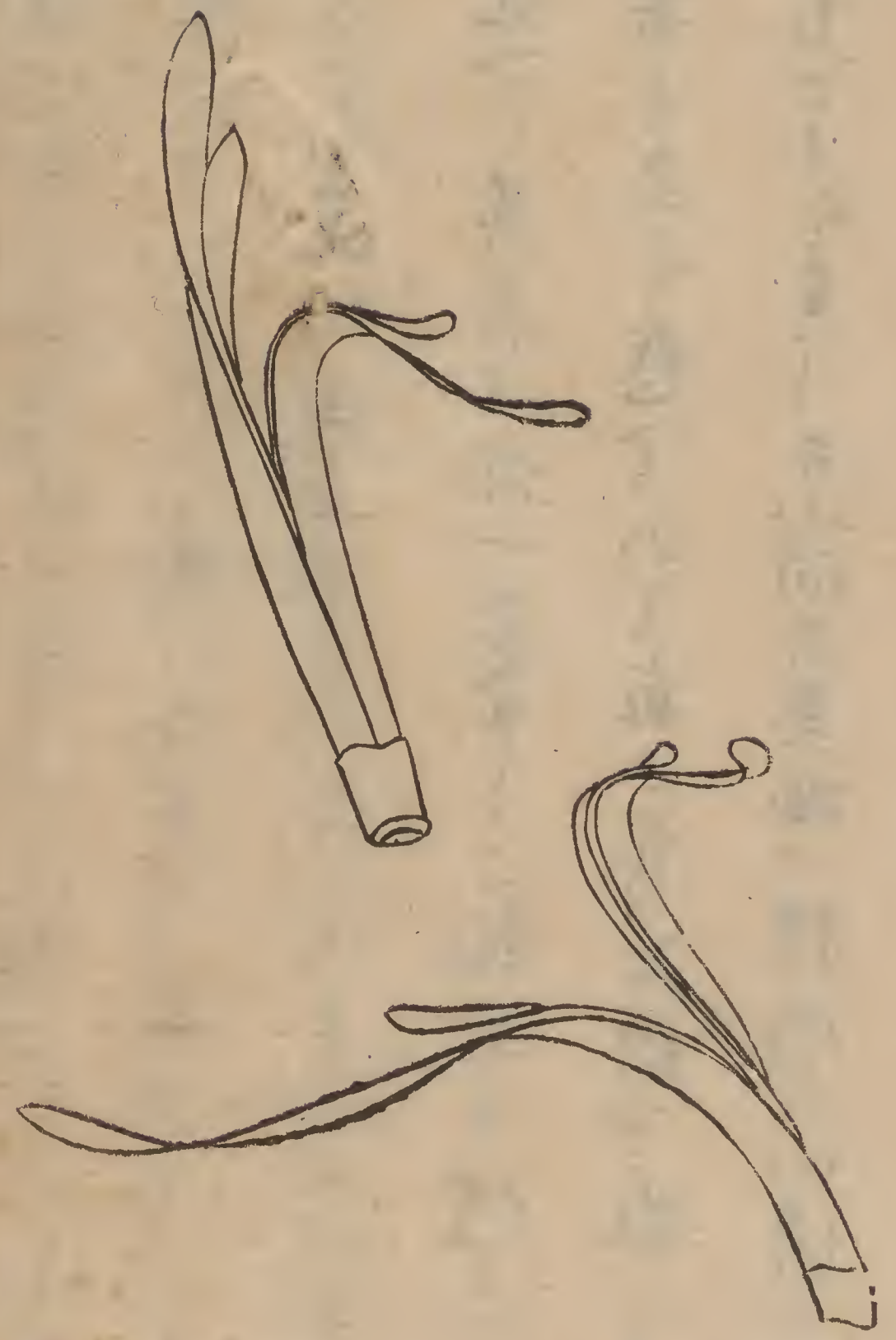
水仙必葉よくあつちやうに
く乃通あつちやうに



如是ハ繪少てハ曲みりて
 折可ハ折れちれども実茎
 まてハ甚い中一團四一以
 尚たの曲折一
 うささ
 うささ



水僊曲葉折莖増如是懸瓶
 置瓶添之物ありていす前流
 左右時宜小應一見斗以用四



古

盡信書不如無書と孟子此言辭宜たある有て本草の
學行きてより一葉一花其名審うたうハ形然とい
とも變化の道止はるハ其説も又止はる理と解證と
述つゝ其名も亦一定さる物あり何まは是何の形と
書かたゝゝ惑するのゝ有ハ其當説を取ら夫とて是トハ
是ともそまゝとて不同名異物一種兩名の傳ハ倭漢美品方言
乃中と僅ハ聞ふまゝ傳ハ得まゝ二三名と揚ハ後乃卷花
瓶の邊ハ誌ハ聊此集を教ハ人の便ハ備ハ見る人不足を
補ハ違つゝと改えまゝ予ハ幸ハ形ハ者乎

